共同研究会大塚班

運動としての大衆文化
第2回共同研究会

日時：2017 年 11 月 4 日（土）
会場：国際日本文化研究センター　第5共同研究室

プログラム

13:30～14:30　マーク・スタインバーグ（カナダ・コンコルディア大学）
「Media Theory in Japan---60 年代におけるマクルーハン理論の受容をめぐって」

14:30～15:00　質疑・討論

15:00～15:10　休憩

15:10～16:10　秦剛（北京外国語大学北京日本学研究センター）
「魯迅と板垣鷹穂・柳瀬正夢」

16:10～16:40　質疑・討論

16:40～17:00　資料紹介「牧野守による戦前映画批評家インタビューについて」（大塚英志）

17:00～19:00　懇親会（日文研内）

共同研究会大塚班「運動としての大衆文化」第2回共同研究会は、メディア理論とその受容について、あるいは「理論の運命」について考えてみます。マーク氏は近編著である「Media Theory in Japan」で主として戦後におけるメディア理論について概観しましたが、同書をベースにマーケティング理論としてマクルーハンが60年代日本でいかに受容されたかを問題とします。80年代において、ボードリヤールやフェミニズム思想が電通などのマーケティング理論として使われた事などを考えあわせると興味深いでしょう。「運動」「大衆文化」はメディア論や現代思想を援用したマーケティングにしばしばコントロールされてきた歴史があります。

秦氏は、魯迅が板垣鷹穂の著書を上海で、リアルタイムで読んでいたことを付きとめましたが、大正アヴァンギャルドや機械芸術論が上海経由で中国にいかに受容されたかについて問題にします。恐らく、これまでの魯迅観を覆すでしょう。大塚は大正アヴァンギャルドの戦時下への延命とおたく文化の成立を関連させ考えてきましたが、さて、中国で一体、何が起きていたのでしょう。

理論を大衆文化研究に援用するのではなく、理論が大衆文化の現場にいかに呑み込まれるかという問題をこそ共有しましょう。